

日なた幼稚園

□小春十一月は日なたの季節です。ね。

南をうけた縁側の日なたがよく、庭にひろげた産の上の日なたもいゝです。ね。テレスとかローンとかの日なたはペリー何んとかいふのでせうが、縁側や産の日なたは、まことに日本的ないゝ心持ちのものです。ね。實際、神代ながらの日々の光りですものね。

□その日なた程、萬物を明るくし、人を和せしめるものではありません。和を以て貴しとすると訓へられてゐながら、日かげでは、つい冷くもなる人心かなが、日なたではほかゝと、ほかゝと、にこゝ、にこゝと、わらひと共に相和して來ます。

□相和してゐる心からは、善いものが生れて來ます。相和してゐる生活からは、美しいものが生れて來ます。少々勿體ない言葉使ひで恐れ入りますが、縁側極樂、産天國、みんな、日なたの有りがたさに

「我」を忘れてゐる樂天地です。

□その樂天地に一番よく滲るものはお年寄りとお子とでせう。お婆さんのお背なかとおんなにまろくなつてゐるのは、日光でふくらんでゐるからです。幼児の頬があんなにまろくなつてゐるのは、日光でふくらんでゐるからです。たゞ違ふのは、お婆さんは目をうつとりしてゐらつしやいます。幼児は目をぱつちりさせてゐます。お婆さんはべちやんとしてゐられます。幼児ははづんでゐます。まるでこむぎです。日なたに暖められて弾力がはちぎれるやうについてゐます。

□幼児の心が相和し、暖められ、内から弾力づけられてゐるのは幼稚園です。私達は、村の農家などを訪ねる時、隣近所の友達が日なたに吸ひつけられて寄り集つて、ほんとうに楽しさうに遊んでゐる縁側日なた幼稚園、産日なた幼稚園に立ち去り難く見とれることがあります。子どもらの聲のほか、しいんとした村の晝さがりの靜かさに、どこかで虹が一匹うなつてゐるほかに何んの音といふ音も

ない。柱も壁も古くくすんだ家には、軒端にすらりと吊した唐辛しの紅いほかに色といふ色もないが、たゞ子どもらの切り抜いた古繪雜誌の色紙の小片が、産の外に散らばつてゐる。やがて、子どもらは、自分達の弾力に持ち切れなくなつて、一齊に野つ原の方へ馳け出して行つた。今まで産のわきで靜に目を細くしてゐた犬も、すわとばかり、子どもらといつしよに走つて行つた。みんなどこへ行くのが。私はにこゝ後を見送ります。どこへ行つたつて、村中日なたです。

□小春十一月は日なたの季節です。どこにもあり、誰れにもある日なたです。しかし、だからといつて、一寸うっかりしてゐると、直き暮れ易い晩秋の日でもあります。油断してゐると、つるべ落しの日は西に、夕べ冷たく、障子幼稚園にはいらなければならなくなります。

日なた愛すべし。

日なた惜むべし。

日なたをだいじにしませう。